十月の末

宮沢賢治

青空文庫

嘉ツコは、小さなわらじをはいて、赤いげんこを二つ顔の前にそろえて、ふっふっと息をふきかけながら、土間から外へ飛び出しました。外はつめたくて明るくて、そしてしんとしています。

嘉ツコのお母さんは、大きなけらを着て、縄を肩にかけて、そのあとから出て来ました。

「母、昨夜、土ぁ、凍みだじゃい。」嘉ツコはしめった黒い地面を、ばたばた踏みながら云いました。

「うん、霜ぁ降ったのさ。今日は畑ぁ、土ぁぐじゃぐじゃづがべもや。」と嘉ツコのお母さんは、半分ひとりごとのように答えました。

嘉ツコのおばあさんが、やっぱりけらを着て、すっかり支度をして、家の中から出て来ました。

そして一寸手をかざして、明るい空を見まわしながらつぶやきました。

「爺んごぁ、今朝も戻て来ないがべが。家でぁこったに忙がしでば。」

「爺んごぁ、今朝も戻て来ないがべが。」嘉ツコがいきなり叫びました。

おばあさんはわらいました。

「うん。けづな爺んごだもな。酔たぐれでばがり居で、一向仕事助けるもさないで。今日も町で飲んでらべぁな。うなは爺んごに肖るやないじゃい。」

「ダゴダア、ダゴダア、ダゴダア。」嘉ツコはもう走って垣の出口の柳の木を見ていました。それはツンツン、ツンツンと鳴いて、枝中はねあるく小さなみそさざいで一杯でした。

実に柳は、今はその細長い葉をすっかり落して、冷たい風にほんのすこしゆれ、そのてっぺんの青ぞらには、町のお祭りの晩の電気菓子のような白い雲が、静に翔けているのでした。

「ツツンツツン、チ、チ、ツン、ツン。」

みそさざいどもは、とんだりはねたり、柳の木のなかで、じつにおもしろそうにやっています。柳の木のなかというわけは、葉の落ちてカラッとなった柳の木の外側には、すっかりガラスが張ってあるような気がするのです。それですから、嘉ツコはますます大よろこびです。

けれどもとうとう、そのすきとおるガラス函もこわれました。それはお母さんやおばあさんがこっちへ来ましたので、嘉ツコが「ダア。」といいながら、両手をあげたものですから、小さなみそさざいどもは、みんなまるでまん円になって、ぼろんと飛んでしまったのです。

さてみそさざいも飛びましたし、嘉ツコは走って街道に出ました。

電信ばしらが、

「ゴーゴー、ガーガー、キイミイガアアヨオワア、ゴゴー、ゴゴー、ゴゴー。」とうなっています。

嘉ツコは街道のまん中に小さな腕を組んで立ちながら、松並木のあっちこっちをよくよく眺めましたが、松の葉がパサパサ続くばかり、そのほかにはずうっとはずれのはずれの方に、白

い牛のようなものが頭だか足だか一寸出しているだけです。嘉ツコは街道を横ぎって、山の畑の方へ走りました。お母さんたちもあとから来ます。けれども、この路ならば、お母さんよりおばあさんより、嘉ツコの方がよく知っているのでした。路のまん中に一寸顔を出している円いあばたの石ころさえも、嘉ツコはちゃんと知っているのでした。厭きる位知っているのでした。

嘉ツコは林にはいりました。松の木や楢の木が、つんつんと光のそらに立っています。林を通り抜けると、そこが嘉ツコの家の豆畑でした。

豆ばたけは、今はもう、茶色の豆の木でぎっしりです。

豆はみな厚い茶色の外套を着て、百列にも二百列にもなって、サッサッと歩いている兵隊のようです。

お日さまはそらのうすぐもにはいり、向うの方のすすきの野原がうすく光っています。

黒い鳥がその空の青じろいはてを、ななめにかけて行きました。

お母さんたちがやっと林から出て来ました。それから向うの畑のへりを、もう二人の人が光ってこっちへやって参ります。一人は大きく一人は黒くて小さいのでした。

それはたしかに、隣りの善コと、そのお母さんとにちがいありません。

「ホー、善コォ。」嘉ツコは高く叫びました。

「ホー。」高く返事が響いて来ます。そして二人はどっちからもかけ寄って、ちょうど畑の堺

で会いました。善コの家の畑も、茶色外套の豆の木の兵隊で一杯です。
「汝(うな)いの家さ、今朝、霜降ったが。」と嘉ツコがたずねました。
「霜ぁ、おれぁの家さ降った。うないの家さ降ったが。」善コがいいました。
「うん、降った。」
それから二人は善コのお母さんが持って来た蓆(むしろ)の上に座(すわ)りました。お母さんたちはうしろで立って談(はな)しています。
二人はむしろに座って、
「わあああああああ。」と云いながら両手で耳を塞(ふさ)いだりあけたりして遊びました。ところが不思議なことは、「わあああんあああ。」と云わないでも、両手で耳を塞いだりあけたりしますと、
「カーカーココーコー、ジャー。」という水の流れるような音が聞えるのでした。
「じゃ、汝(うな)、あの音ぁ何の音だが覚(おべ)だが。」
と嘉ツコが云いました。善コもしばらくやって見ていましたが、やっぱりどうしてもそれがわからないらしく困ったように、
「奇体(きたい)だな。」と云いました。
その時丁度嘉ツコのお母さんが畦(あぜ)の向うの方から豆を抜きながらだんだんこっちへ来ましたので、嘉ツコは高く叫びました。

「母、こう云にしてガアガアど聞えるものぁ何だべ。」
「西根山の滝の音さ。」お母さんは豆の根の土をばたばた落しながら云いました。二人は西根山の方を見ました。けれどもそこから滝の音が聞えて来るとはどうも思われませんでした。
お母さんが向うへ行って今度はおばあさんが来ました。
「ばさん。こう云にしてガアガアコーコーど鳴るものぁ何だべ。」
おばあさんはやれやれと腰をのばして、手の甲で額を一寸こすりながら、二人の方を見て云いました。
「天の邪鬼の小便の音さ。」
二人は変な顔をしながら黙ってしばらくその音を呼び寄せて聞いていましたが、俄かに善コがびっくりする位叫びました。
「ほう、天の邪鬼の小便ぁ永いな。」
そこで嘉ツコが飛びあがって笑っておばあさんの所に走って行っていいました。
「アッハッハ、ばさん。天の邪鬼の小便ぁたまげだ永いな。」
「永いてさ、天の邪鬼ぁいっつも小便、垂れ通しさ。」とおばあさんはすまして云いながら又豆を抜きました。嘉ツコは呆れてぼんやりとむしろに座りました。
お日さまはうすい白雲にはいり、黒い鳥が高く高く環をつくっています。その雲のこっち、豆の畑の向うを、鼠色の服を着て、鳥打をかぶったせいのむやみに高い男が、なにかたくさ

ん肩にかついで大股に歩いて行きます。

「兵隊さん。」善コが叫びながらそっちへかけ出しました。

「兵隊さんだない。鉄砲持ってないぞ。」嘉ツコも走りながら云いました。

「兵隊さん。」善コが又叫びました。

「兵隊さんだない。鉄砲持ってないぞ。」けれどもその時は二人はもう旅人の三間ばかりこっちまで来ていました。

「兵隊さん。」善コは又叫んでからおかしな顔をしてしまいました。見るとその人は赤ひげで西洋人なのです。おまけにその男が口を大きくして叫びました。

「グルルル、グルウ、ユー、リトル、ラズカルズ、ユー、プレイ、トラウント、ビ、オッフ、ナウ、スカッド、アウエイ、テゥ、スクール。」

と雷のような声でどなりました。そこで二人はもうグーとも云わず、まん円になって一目散に逃げました。するとうしろではいかにも面白そうに高く笑う声がします。向うの方ではお母さんたちが心配そうに手をかざしてこっちを見ていましたが、やがて一寸おじぎをしました。二人は振り返って見ますとその鼠色の旅人も笑いながら帽子をとっておじぎをして居りました。そして又大股に向うに歩いて行ってしまいました。

お日さまが又かっと明るくなり、二人はむしろに座ってひばりもいないのに、

「ひばり焼げこ、ひばりこんぶりこ、」なんて出鱈目なひばりの歌を歌っていました。

そのうちに嘉ツコがふと思い出したように歌をやめて、一寸顔をしかめましたが、俄かに云いました。

「じゃ、うないの爺んごぁ、酔ったぐれだが。」

「うんにゃ、おれぁの爺んごぁ酔ったぐれだない。」善コが答えました。

「そだら、うないの爺んごど俺ぁの爺んごど、爺んご取っ換えだらいがべじゃい。取っ換えないどが。」嘉ツコがこれを云うか云わないにウンと云うくらいひどく耳をひっぱられました。見ると嘉ツコのおじいさんがけらを着て章魚のような赤い顔をして嘉ツコを上から見おろしているのでした。

「なにしたど。爺んご取っ換えるど。それよりもうなのごと山山のへっぴり伯父さ呉でやるべが。」

「じさん、許せゆるせ、取っ換えないはんて、ゆるせ。」嘉ツコは泣きそうになってあやまりました。そこでじいさんは笑って自分も豆を抜きはじめました。

＊

火は赤く燃えています。けむりは主におじいさんの方へ行きます。

嘉ツコは、黒猫をしっぽでつかまえて、ギッと云うくらいに抱いていました。向う側ではも

う学校に行っている嘉ツコの兄さんが、鞄から読本を出して声を立てて読んでいました。

「松を火にたくいろりのそばで
　よるはよもやまはなしがはずむ
　母が手ぎわのだいこんなます
　これがいなかのとしこしざかな。第十三課……。」

「何したど。大根なますだど。としこしざがなだど。あんまりけづな書物だな。」とおじいさんがいきなり云いました。そこで嘉ツコのお父さんも笑いました。

「なあにこの書物ぁ倹約教えだのだべも。」

ところが嘉ツコの兄さんは、すっかり怒ってしまいました。そしてまるで泣き出しそうになって、読本を鞄にしまって、

「嘉ツコ、猫ぉおれさ寄越せじゃ。」と云いました。

「わがないんちゃ。厭んたんちゃ。」と嘉ツコが云いました。

「寄越せったら、寄越せ。嘉ツコぉ。わあい。寄越せじゃぁ。」

「厭んたぁ、厭んたぁ、厭んたったら。」

「そだら撲だぐじゃい。いいが。」嘉ツコの兄さんが向うで立ちあがりました。おじいさんがそれをとめ、嘉ツコがすばやく逃げかかったとき、俄に途方もない、空の青セメントが一ぺんに落ちたというようなガタアッという音がして家はぐらぐらっとゆれ、みんなはぼかっとして

呆れてしまいました。猫は嘉ツコの手から滑り落ちて、ぶるるっとからだをふるわせて、それから一目散にどこかへ走って行ってしまいました。「ガリガリッ、ゴロゴロゴロゴロ。」音は続き、それからバァッと表の方が鳴って何か石ころのようなものが一散に降って来たようです。

「お雷さんだ。」おじいさんが云いました。

「雹だ。」お父さんが云いました。ガアガアッというその雹の音の向うから、

「ホーオ。」ととなりの善コの声が聞えます。

「ホーオ。」と嘉ツコが答えました。

「ホーオオ。」となりで又叫んでいます。

「ホーオオー。」嘉ツコが咽喉一杯笛のようにして叫びました。

俄に外の音はやみ、淵の底のようにしずかになってしまって気味が悪いくらいです。

嘉ツコの兄さんは雹を取ろうと下駄をはいて表に出ました。嘉ツコも続いて出ました。空はまるで新らしく拭いた鏡のようになめらかで、青い七日ごろのお月さまがそのまん中にかかり、地面はぎらぎら光って嘉ツコは一寸氷砂糖をふりまいたのだとさえ思いました。

南のずうっと向うの方は、白い雲か霧かがかかり、稲光りが月あかりの中をたびたび白く渡ります。二人は雀の卵ぐらいある雹の粒をひろって愕ろきました。

「ホーオ。」善コの声がします。

「ホーオ。」嘉ッコと嘉ッコの兄さんとは一所に叫びながら垣根の柳の木の下まで出て行きました。となりの垣根からも小さな黒い影がプイッと出てこっちへやって参ります。善コです。嘉ッコは走りました。

「ほお、雹だじゃい。大きじゃい。こったに大きじゃい。」

善コも一杯つかんでいました。

「俺家のなもこの位あるじゃい。」

稲ずまが又白く光って通り過ぎました。

「あ、山山のへっぴり伯父。」嘉ッコがいきなり西を指さしました。西根の山山のへっぴり伯父は月光に青く光って長々とからだを横たえました。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社
1989（平成元）年2月25日発行
1989（平成元）年6月10日2刷
入力：蒋龍
校正：noriko saito
2008年7月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十月の末

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/